様式５

平成28年度自己評価シート（年度末評価）

校番	68	学校名	広島県立祇園北高等学校	校長氏名	柞磨　昭孝	㊎・定・通	㊍・分

学校経営目標

達成目標	評価指標	前年度 実績値	本年度 目標値	本年度 実績値	評価	理　由	担当部等
1　生徒の主体的な学びを促す授業づくりの推進と業務改善の推進　①⑥							
生徒が主体的に授業に参加するとともに，深い学びを実現している。	生徒の授業評価（４段階評価）【新規】	―	3.2	3.52	A	第1回授業アンケート肯定的指数 3.44 から第2回は 3.52 と上昇した。	教務部
	ICE モデルを軸とした授業構成の実施率 【新規】	―	80%	100%	A	ICEモデルを軸とした授業構築の実施率は，目標の 80%を上回り，全員が構築を目指している	
	定期試験における E レベルの出題率【新規】	―	10%	9.19%	B	定期考査での E レベル出題率は，目標の 10%を下回り，9.19%であった。	
教職員が業務を組織的に遂行し，創意工夫を生かし，業務の改善に取り組み，業務の質的な向上を図っている。	エビデンスに基づいた改善方針の策定と実施率【新規】	―	60%	63.8	A	学校の業務改善に係るアンケート結果，学校において策定した業務改善の取組計画について，学校全体で取り組んでいる率が，63.8%であった。	校務運営会議

【評価結果の分析】

・第 2 回授業評価アンケートの結果が，第 1 回授業評価アンケート結果の授業に関する肯定的評価 3.44 から 3.52 へと上昇し，概ね生徒の授業満足度は高いものであると考えられる。ICEモデルを軸とした授業づくりの実施率は，中間評価の 84%を上回り，教職員全員が授業づくりに向けて取り組んでいることがわかった。公開研究授業や講師による講演会や公開パネルディスカッションなど，様々な取組を重ねることで全教職員の意識が高まっている傾向と考える。また，定期考査における E レベルの出題率は，目標の 10%を下回ったが，中間評価の数値と比較すると 0.51 ポイント上昇し，9.19 ポイントであることから数値が伸びていることが考えられる。さらに，活用問題の質の向上も見られた。（教務部）

・業務改善に係るアンケート結果（第3回）において，「各学校において策定した業務改善の取組計画について，学校全体で取り組んでいる」の肯定的評価は昨年度の 61.4%から 63.8%に上昇した。今年度，生徒と向き合う時間の確保のため，①各会議における会議の回数及びその所要時間の削減 ②起案プロセスの効率化・簡素化 ③部活動の休養日設定等に取り組んだことが全体的な取組につながったと考えられる。（校務運営会議）

【今後の改善方策】

・授業評価アンケートの授業に関する肯定的評価は上昇しており，この状態を維持しながら，次年度も生徒の主体的な学びの授業づくりを促進していく。今年度作成した各教科のルーブリックを各単元の授業評価・シラバス・定期考査における評価に反映していくことが重要な取組となる。また，様々な方面から新しい授業づくりに関する講師の方々を招聘し，さらに学校全体の意識向上に努める。活用問題の質の向上に努め，実践推進リーダーや中核教員の先生方とも連携し，更なる問題づくり研究を行う。（教務部）

・新たな取組が増えており，主任及び教職員の役割と責任が明確になっていない業務がある。アンケート結果において「新たな取組を行う場合，既存の取組の縮小や廃止などスクラップアンドビルドを行っている」の肯定的評価は今年度第 1 回調査の 40%から今回 48.3%に向上したものの，半数以下となっている。各分掌で業務内容を改めて洗い出し，校務運営会議で検討を行う。（校務運営会議）

達成目標	評価指標	前年度 実績値	本年度 目標値	本年度 実績値	評価	理　由	担当部等
2　高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実　③⑤							
自己の生き方，在り方を考え，進路目標を設定し，その第一希望の進路実現に向け努力する生徒を育成する指導がなされている。	国公立大学 現役合格者数	83 人	100 人	96 人（3/24 現在）	B	国公立大学（AO・推薦）合格者は 16 人であった。前期試験で 61 人，中・後期で 18 人の合格数であった。	進路指導部
	大学入試センター試験結果（900 点換算）が全国平均点以上の人数	27 人	50 人	49 人	B	前年度よりも人数は増加し，生徒の努力と教員の指導力により目標値程度になった。	

		１年１月模試における国数英総合偏差値 54 以上の人数	58 人	80 人	85 人	A	年間通しての指導により，前年度より増加し目標値を超えた。	
		２年１月模試における国数英総合偏差値 54 以上の人数	75 人	80 人	33 人	C	前年度より人数は減少し，目標値を大きく下回った。2月マークでは 66 人と少し挽回している。	
	本校の教育活動を，中学生及び保護者等に対して，定期的・効果的に情報発信している。	オープンキャンパスの参加者数	1,460 人	1,500 人	1,507 人	A	・第1回目(7月)は 1,087 人の生徒・保護者が参加，第2回目(10 月)は 420 人の生徒・保護者が参加した。いずれも，全プログラムで 90%以上の肯定的評価を得た。	総務部
		ＨＰの更新回数	120 回	130 回	146 回	A	中学校や地域・保護者への案内や学校での行事や部活動等の内容をタイムリーに更新した。	
	探究コースとして，理数コースの授業が展開され，生徒が理数コンピテンシーを発揮している。	評価規準の作成と活用レベル（４段階尺度）【新規】	－	Ｂレベル	Ｂレベル	B	中高生の科学研究実践活動推進プログラムを中心として探究コースのベースができつつある。	理数コース

【評価結果の分析】

・3学年は，大学入試センター試験（900 点換算）の点数において全国平均点以上となった人数が昨年度の 27 人（国公立大現役合格数 83 人）から 49 人に増加した。国公立大の AO・推薦入試では，1月末で 16 人の合格者を出し，小論文指導など個に応じた細やかな指導の成果がみられた。大学入試等に十分対応できる学力を養成するために，授業をはじめ早朝及び放課後補習を実施してきた。センター試験後も二次対策補習や個別指導等を組み，前期のみならず中期・後期試験に向けて生徒が積極的に指導を受け，粘り強く取り組んだ。（進路指導部）

・模擬試験の国数英総合偏差値については，2学年は7月 49.6→11月 48.0→1月 47.7 と下降傾向である。11 月との教科別比較では，国語 49.2→49.2，数学 48.3→47.1，英語 47.4→48.6 という変動であった。数学が下がった要因の1つとして，11 月まで出題されていた小問集合（答えのみ）が無くなり，すべて記述問題となり，対応できず点数が思うように取れなかった可能性がある。文系を中心に苦手分野の得点率が低かった。2月マークは，1 月記述との教科別比較では国語 49.2→50.7，数学 48.1→50.1，英語 48.6→49.4 であった。記述とマークということで単純比較はできないが，上昇傾向にあると言える。（進路指導部）

1学年は，7月 49.0→11月 48.6→1月 50.9 と上昇傾向である。7 月との教科別比較では，国語 49.3→51.9，数学 50.2→51.0，英語 48.1→49.9 とバランスよく上昇してきた。国数英総合偏差値 54 以上の人数も 85 人であり，目標値を上回った。（進路指導部）

・第1回オープンキャンパスを生徒中心に進行し，歓迎パフォーマンスや学校紹介ビデオを開会行事に組み入れた。また，体験授業を5教科に拡大して募集したところ，希望者が増加し，たいへん好評であった。第2回オープンキャンパスでは，高校受験を意識した参加者に向けて，在校生による受験体験発表や保護者対象の入試説明会を実施し，好評であった。（総務部）

・本校HPを利用した広報活動が課題であったが，行事や分掌・学年・部活動について生徒の取組が具体的にわかるように画像を加え，タイムリーに更新することができた。（総務部）

・コンテンツベースの学びからコンピテンシーベースの学びへの移行を念頭に，本年度から理数コンピテンシーの育成に係る取組を始めた。とりわけ，本校が「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」の指定校であることを重視し，当該プラグラムをコンピテンシー育成に係る研究実践の柱として展開した。理数コンピテンシーに関して，科学的事象等に係る行動志向から，育成に有効な手立てのモデル作成に取り組み，相関分析等からおおよその傾向を把握することができた。たとえば，「分からないことが分かるようになりたい」と「物事の根拠を考えることを大事にしている」は高い相関関係にある。これらの結果から理数コンピテンシー育成に係る諸要素を抽出し，カテゴライズし，指導の指標として用いた。理数コンピテンシーの育成は3段階に分け，今年度は生徒の主体的な学びを中心課題とし，第1段階として，自己認識や成長実感の獲得，「関心・意欲」の醸成等について指導・評価を行った。成長実感に係るアンケート項目「あなたはこの科学研究活動を行うことで以前の自分よりも成長しましたか。」への回答は，100%肯定的評価（非常に成長した;41%）であった。また，関心・意欲に関しては，その高まりや継続性が最も重要となるが，「今後このような科学研究活動を行う機会があれば，またやってみたいですか。」への回答では，「ぜひやりたい」が 78%に達するなどに高い教育効果をあげることができた。理数コンピテンシーを構造化し，取組の第2段階である「ストラテジーの習得と活用」に連接するために，さらに分析・検討を深める必要がある。（理数コース）

【今後の改善方策】

・基礎学力の定着に向けて，入学時の初期指導のみならず，特に今年度重視して取り組んだ進路検討会議資料の改善や模試返却時の教科担任面談，進路意識の高揚を図った学年集会等を更に充実させるとともに，より計画的・組織的に行われるように体制を整え，生徒の学習意

欲の低下を防ぐような意識向上の取組を推進していく。（進路指導部）
・大学入試問題研究を行う中で，そのような問題を授業内容に盛り込むなど授業改善を図り，また補習等の学力向上に係る事業や進路別指導等の在り方を改めて見直し，より効果的な指導となるように再構築を行う。（進路指導部）
・模試の過去問題や入試問題を授業の中で効果的に扱い，到達度が測れるように週末課題（模試過去問題含む）等の難易度を調整しながら計画的に課すことで，学力の向上を図る。（進路指導部）
・第1回（7月）のオープンキャンパスは，体育館の収容人数と気候を考慮するとこれ以上参加者が増えると運営が難しく，午前・午後の2展開で実施するなど工夫が必要である。第1回と第2回の学校紹介の内容が重複する部分があるため，第1回は学校紹介・第2回は入試説明会の内容で年度当初に中学校に案内し，目的を明確にする。（総務部）
・本校HPの内容をタイムリーな更新を継続し，中学生や地域・保護者に対して多くの本校教育活動の情報を伝えるようにする。（総務部）
・理数コンピテンシーに係る文献研究を行い，高校段階で効果的に育成できるようなレベルや内容に再構成することで，指導の実践性を高める。また，生徒の自己評価能力，特にメタ認知能力を高め，理数コンピテンシーに係るストラテジーを生徒自身が意識して活用できるようなプログラムを作成し，評価・改善を行う。（理数コース）

3 北高生として自覚とグローバル社会で逞しく生き抜く力の育成，個に応じた指導や支援の充実　②④

家庭学習を習慣化させる取組がなされている。	宅習時間調査での目標達成率 （1年 130 分/日） （2年 130 分/日） （3年 260 分/日）	1年 40% 2年 46% 3年 31%	1年 55% 2年 60% 3年 40%	1年 34% 2年 45% 3年 29% (平均)	C	年間通じて全学年とも目標を下回った。1 月の達成率は 1 年 27%，2 年62%であり，2 年のみ目標値を上回った。 3 年は 9 月 42%，11 月 52%であり，夏季休暇後，目標値を上回った。	進路指導部
規範意識の高い生徒を育成する指導がなされている。	1日平均の遅刻者数	4.8 人	4.0 人	5.1 人	C	目標は達成できなかったが，配慮を要する生徒に関するデータを含んでおり，全体としては概ね良好である。	生徒指導部
生徒の自己存在感を高める取組がなされている。	主体的に行事や委員会，部活動，ボランティア活動に参加したと考える生徒の割合	80%	90%	3年 93% 2年 81% 1年 80% 全体 85%	B	ボランティア活動や交通安全啓発活動など，部活動や学校行事以外にも生徒会を中心とした主体的な活動が見られるようになってきた。	
文武両道を目指す生徒を育成する取組がなされている。	部活動加入率【新規】 H27 年度（84%）	－	90%	5月 84% 3月 84%	B	目標を下回ったが，4月当初加入率を維持できている。	
	中国大会以上出場部【新規】 H27 運動部　4/30 文化部　1/13	－	運動部 6 文化部 2	運動部 5 文化部 2	B	概ね目標を達成した。目標を明確にして計画を立て，集中力の高い中で活動できる部が増えてきた。	
特別支援教育活動が組織的に行われている。	生徒・保護者アンケートの肯定的回答率 【生徒用については，前年度の項目を変更】	－	75%	86%	A	定例会議で生徒状況を適宜共有し，校内委員会で協議する等早期の支援につなげることができた。月1回の教育相談は十分活用され，カウンセラーと連携のうえ効果的な支援ができた。	保健部

	校内環境美化活動が積極的に行われている。	生徒・保護者アンケートの肯定的回答率 【生徒用については，前年度の項目を変更】	－	75%	88%	A	美化強化月間や大掃除，小中高合同美化活動を通して，美化委員会が中心となり，積極的に清掃活動に取り組む意識が向上した。	

【評価結果の分析】

・宅習時間調査（4・6・9・11・1月）の目標達成率の推移は1学年（46%→34%→35%→26%→27%），2学年（46%→36%→38%→45%→62%），3学年（4%→17%→42%→52%）であった。2学年は11月・1月集計において目標達成率を上回った。3年に向けての学習の姿勢や進路実現に向けての進路講演会（12 月・1 月実施）や学年集会を行うことで進路意識の高揚を図った。1学年は1月集計結果において自宅学習時間 10 時間未満が40%と増加したため，1学年進路担当主導で放課後学習や面接等を行い，学習時間を増加させる取組を開始した。両学年とも自宅学習を充実させる取組を行ってきたが，設定目標値に届かなかった。しかし，進級する次学年のスタートへと繋がるものと考える。3学年は夏休み以降，多くの生徒が学習時間を増加させ，9月・11月では目標値を上回った。但し，年間を通じては目標を達成できなかった。（進路指導部）

・遅刻者については通院などの理由による者も含んでおり，目標値 4.0 人以下を達成するのは困難であると考える。（生徒指導部）

・ボランティア活動については「あしなが募金活動」と「ルワンダへのシューズ寄贈」が中心であるが，全校生徒への周知が不十分である。

・部活動については，厳しさを受け入れて自己変革を成し遂げていく生徒がいる中で，競技水準の高い部活に仲間づくり程度の意識で入部して生活リズムがつくれなくなる生徒が増加傾向にある。（生徒指導部）

・生徒対象のアンケートでは，本校は「教育相談体制が整っており，心配事や悩み事を相談しやすい環境である」という回答が約9割を占めた。週単位で生徒の状況について情報共有を行っており，気になる生徒に対する迅速・丁寧な支援ができている。一方，保護者対象のアンケートでは「相談体制が整っている」という肯定的回答が第1回目よりも13.5%減少した。生徒・保護者に届くような全体的な取組も適時進めていく必要がある。「体罰・セクハラ相談窓口」の周知については，昨年度よりも周知の回数を増やしたが，生徒・保護者ともに専用窓口（部屋）があるものと誤って理解しているケースもあり，多方面から周知しているにもかかわらず，否定的な回答が減少していない。（保健部）

・校内美化活動については，掃除に積極的に取組んでいると回答した生徒の割合が 95%を超え，特にごみ分別の徹底では日々の指導により成果が上がっている。しかし，「校内に落ちているごみを自主的に拾う」と回答した生徒の割合は 70%にとどまっており，明確に意思表示をした生徒はわずか 18%である。自主的に校内美化を進めていくことができる生徒を増やしていきたい。（保健部）

【今後の改善方策】

・各教科において，初期指導を含め，予習・復習の方法についてより具体的な指導を生徒に行うとともに，家庭学習の内容及び成果が日々の授業にリンクして十分生かされるような学習指導，授業づくりの改善を組織的に行う。
宅週時間記録様式の簡素化を図り，生徒が毎朝，前日を振り返りながら記入できるよう指導を工夫していく。
次年度より，週1回以上の部活動の休養日を設定することで，心身の疲れを取り，学習時間の確保と部活動と学習との両立を推進する。
自らの興味・関心と学問のつながりを意識させることで，進路希望の幅を広げるとともに主体的な学習態度を喚起する。（進路指導部）

・遅刻については，これまでの校門指導（8:15～8:30）に加えて遅刻者に対する指導（8:30～）が必要である。（生徒指導部）

・部活顧問と担任との連携を深め，4月の部活加入率を年度末まで維持する。（生徒指導部）

・保護者対象の第2回目のアンケート結果によれば，本校の教育相談体制について，「よくわからない」という回答が 17%を超えており，1回目よりも7%増加した。他校の実践例を参考にする等，アナウンス方法を工夫し，保健部の取組が伝わるよう努める。また，個別支援の充実はもとより，集会や行事予定表・学年便り等を活用して，全体への働きかけを適時効果的に行う。（保健部）

・校内美化活動について，学校の環境美化を自分たちの手で積極的に進めていこうとする意識を今まで以上に高めるために，授業，クラス活動，部活動，行事等，あらゆる教育活動を通じて意識づけを行い，生徒の行動につなげていく指導を保健部が主導となり組織的に推進する。また，校舎外にゴミ箱を設置し，生徒の自主的行動を促す取組を行う。（保健部）